

令和 6 年 6 月 16 日現在

機関番号：20102

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2023

課題番号：18K12931

研究課題名（和文）北アイルランドにおける長期紛争経験と自然資源管理

研究課題名（英文）Long-term conflict experience and natural resource management in Northern Ireland

研究代表者

北島 義和（Kitajima, Yoshikazu）

釧路公立大学・経済学部・准教授

研究者番号：70782952

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、北アイルランドの首都ベルファストに隣接する丘陵を対象として、20世紀後半から現在までのその利用や管理の歴史を明らかにすることである。特に当地における1990年代までの紛争やその後の社会変化に注目しながら、丘陵に関わる諸アクターがどのような実践を行ってきたのか、そして彼らの間でどのような協力や軋轢が生じてきたのかについて分析を行った。これらの分析からは、ベルファスト丘陵の歴史においては「紛争問題」と「都市問題」が多様な形で絡まりあっていることが判明した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

紛争と自然資源管理の間の関係性を問う環境的平和構築研究の分野においては、これまで紛争当事者間の平和構築という側面に注目がなされることが多かった。しかし、本研究ではベルファストという比較的落ち着いた紛争後社会を対象とすることで、紛争や平和構築の問題と並行して存在し、紛争後にはそのウェイトが増してきている、都市に隣接する自然環境の管理をめぐる問題（特に自然のレクリエーション利用をめぐる問題）についても射程に入れた分析を行い、紛争研究と自然資源管理研究の間の新たな架橋のあり方を提示することができた。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research is to clarify the history of the use and management of the hills adjacent to Belfast, the capital of Northern Ireland, from the late 20th century to the present. Paying particular attention to the conflicts in the region up until the 1990s and the social changes that followed, it examines what kinds of practices the various actors involved in the hills have carried out, and what kinds of cooperation and friction have arisen among them. These analyzes reveals that “conflict issues” and “urban issues” are intertwined in diverse ways in the history of Belfast Hills.

研究分野：社会学

キーワード：自然資源管理 紛争経験 紛争後社会 北アイルランド アクセス権 レクリエーション

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

近代以降、日本も含めた先進諸国においては、第一次産業の経済的・社会的な影響力が相対的に低下するとともに、それと反比例するように農村に存在する自然資源をレクリエーションの対象として捉える動きが隆盛してきた。しかし、農村の自然資源に対するレクリエーション機能の充足要求や実際の利用の拡大は、当該資源を何らかの形で所有しているアクターとの対立を生じさせてしまうことも少なくない。本研究では、このような対立的状況を「農村アクセス問題」と呼び、イギリス領北アイルランドの首都ベルファストにおけるその実態を調査する。

ベルファストは、特に1960年代から1990年代にかけて、カトリック住民とプロテスタント住民の間での深刻な武力紛争を経験した都市であり、その市街地の北と西には面積約4,500haの丘陵が隣接している。「ベルファスト丘陵」と呼ばれるこの丘陵は、いくつもの私有地および公有地から成り、農地や採石場などとして使われてきた。同時にベルファスト丘陵は、隣接するベルファストの都市住民によって散策などのレクリエーションの場としても利用されてきた。そのため2004年には、ベルファスト丘陵の適切な保全と管理を図るため、「ベルファスト丘陵パートナーシップ」という関係者の対話の場が設置され、様々なプロジェクトが実施されてきた。他方で、丘陵のレクリエーション利用や不法投棄などの反社会的行動をめぐって、レクリエーション利用者と土地所有者の間には軋轢も生じている。

### 2. 研究の目的

本研究はベルファストという紛争を経験した地域社会において、農村アクセス問題がどのように立ちあらわれているのかについて分析することを目的とする。特に、この地域で長期にわたって続いた武力紛争をめぐる経験が、ベルファスト丘陵に関わる様々なアクターの実践や他のアクターへの向き合い方に、どのような影響を与えてきたのかを明らかにしたい。ベルファストのような紛争後社会の農村アクセス問題においては、武装組織・軍隊・不法投棄者といった「対話のできない他者」をめぐると異なる経験が大きな影響を与えているのではないかと考えられる。本研究は、このような対話のできない他者の存在に着目しつつ、これまでの紛争研究や自然資源管理研究ではほとんど論じられてこなかった、長期紛争経験と自然資源管理の間の関係性を捉えていく。

### 3. 研究の方法

3年の研究期間中に計5回(それぞれ1~2週間)のベルファストへの渡航をおこない、現地において、土地所有者やレクリエーション利用者などへのインタビューやそれらのアクターの活動の観察、彼らの対話の場となっているベルファスト丘陵パートナーシップの関係者へのインタビューやその活動の観察、図書館や公文書館に所蔵されている関連資料の収集、をそれぞれ実施する。

### 4. 研究成果

#### (1) 研究計画の変更

当初はベルファスト丘陵に関わるすべてのアクターにインタビューを行う予定であったが、行政関係者と産業関係者からは快い返事を得られず、またコミュニティ組織などのレクリエーション利用者へのインタビューと比べて、農民などの土地所有者へのインタビューは、量と質において同等に実施することが難しかった。さらに、丘陵の広大さから、関係するすべての地域を3年でカバーするのは困難であることも判明した。そのため、ベルファスト丘陵全体に関しては、レクリエーションアクセスをめぐる状況に焦点を当てる形で、その利用と管理の歴史を検討することとし、それと同時にケーススタディとして西ベルファストのカトリック地区とその周辺を取り上げ、この地域における多様な関係者の丘陵をめぐる実践について分析することにした。

研究期間の3年目に発生した新型コロナウイルスの流行によって、予定していたベルファストでの最後のフィールドワークが実施できなくなったため、研究の一時中断と渡航が再び可能になるまでの研究期間の延長(3年)を余儀なくされた。しかし、ベルファストでは新型コロナウイルスの流行に伴ってロックダウンが実施された結果、市民が近場のレクリエーション空間としてベルファスト丘陵の価値を再認識するとともに、様々な新しい動きも生まれていった。この意味では、コロナ禍は本研究に予想外の追加データを提供した。

#### (2) ベルファスト丘陵へのレクリエーションアクセスの歴史

古くからベルファスト丘陵は、北部のケイプヒルや西部のブラックマウンテンなどを中心に、ベルファスト市民のレクリエーションの場であったが、その利用は1960年代の紛争の勃発とともに縮小した。特に丘陵の最高峰であるディビスとブラックマウンテンは、その大部分が防衛省によって購入され、紛争のために駐留してきた英国軍によって市街地を見張る監視ポイントとして利用されることになったため、付近の住民以外がレクリエーションをおこなうことは少なくなった。

しかし 1980 年代半ば頃になると、当時ベルファスト丘陵の複数の場所で進行していた環境破壊や環境劣化に対して、それぞれの場所の付近に暮らす住民たちが懸念を抱き、ボランティア組織を結成して反対運動や保全活動などを開始した。そして 1990 年代になると、これらの組織は互いにネットワークを築き、ベルファスト丘陵全体の保全を求める活動に乗り出していった。これらの活動の中でしばしば彼らはプロテスタント住民 / カトリック住民という立場を越えて協働し、丘陵全体のパブリシティの向上のために「ベルファスト丘陵を救えウォーク」という山歩きのイベントをおこなったり、「ベルファスト丘陵委員会」を結成して丘陵の保護区指定を求めたりした。

このような流れを受けて、1992 年には当時の環境大臣が、ベルファスト丘陵の管理と保全のために、「地域公園」としての指定を進めると宣言した。その後、この地域公園計画は頓挫したものの、その代替として 2004 年に、ベルファスト丘陵に関係する諸団体がその管理について話し合う「パートナーシップ」が発足した。このベルファスト丘陵パートナーシップは、環境省、自治体、環境団体、レクリエーション団体、コミュニティ組織、そして丘陵で土地を所有している農民、採石場所有者、ゴミ処理場所有者がそれぞれ代表を送る理事会を持ち、専属のスタッフを雇用して、現在までベルファスト丘陵に関わる様々なプロジェクトに取り組んできた。具体的には、丘陵での定期的なイベント開催、野生生物の調査、山火事や不法投棄の防止活動、ガイドマップの作成、ボランティアの育成、地域コミュニティや学校による自然保護活動の支援などである。

以上のようなフォーマルな資源管理体制の構築と並行して、丘陵におけるレクリエーションスポットも増加していった。その中でも画期的だったのは、ディビスとブラックマウンテンの開放である。1990 年代の和平プロセスの進展に伴って英国軍の駐留の必要性が薄れたため、2004 年に防衛省はこれらの山にある所有地をナショナルトラストに売却した。ナショナルトラストはそこに遊歩道などを設置し、現在ではレクリエーションスポットとしてカトリックとプロテスタント双方の住民が利用するようになっている。

しかし、このような丘陵のレクリエーション利用の拡大とともに、新たな問題も浮き彫りになった。それは丘陵における私有地の所有者、とりわけ農民との関係である。例えば、1990 年代に地域公園計画が頓挫し、その後パートナーシップという、より緩やかな管理組織が作られることになった背景には、農民からの強い反対があった。地域公園となってしまうと大勢の人々が農地に入って来てしまうのではないかと彼らは懸念したのだ。実際、ベルファスト丘陵パートナーシップの事業エリアのうち約 70% は私有地であり、その少ない部分を農地が占めている。しかし、これまでベルファストの人々は、公有地に加えてそのような私有地にも非合法的な形でアクセスし、レクリエーションをおこなってきた。そのため、ベルファスト丘陵パートナーシップの理事会では、コミュニティ組織理事たちがそのような非合法的なアクセスの合法化を欲してきたが、それに対して農民理事たちは反対の姿勢を続け、議論は平行線のままであった。

そのような中、2020 年にベルファストでは新型コロナウイルスの流行拡大に伴ってロックダウンが実施された。この間、近場でのレクリエーションの機会を求めてこれまでにない規模の人々がベルファスト丘陵に押し寄せ、ディビスなどのレクリエーションスポットでは渋滞や混雑が発生した。そしてこの状況は、ベルファスト丘陵のアメニティとしての重要性を都市の人々により認識させることになった。2021 年には、カトリック地区から選出されたベルファスト市議が、市議会の「人々とコミュニティ」委員会において、ベルファスト丘陵のレクリエーションインフラの改善やより多くのアクセスポイントの探査を求める動議を提出し、プロテスタント地区選出の市議たちも含めた全会一致で採択された。また同年には、ベルファスト丘陵パートナーシップの元コミュニティ組織理事の 1 人が中心となって、「ベルファスト丘陵アクセスキャンペーン」というグループも結成された。この元理事は『ベルファスト丘陵へのアクセス：約束、裏切り、そして行動の呼びかけ』という文書を発表し、市に対して丘陵への非合法的なアクセスの合法化に乗り出すよう求めると、この文書の是認を求める動議が「人々とコミュニティ」委員会において再び全会一致で採択された。これらの動きを受けて、現在ベルファスト市役所は丘陵への新たなアクセスの開発可能性に関する調査に着手している。

### (3) 西ベルファストのカトリック地区とその周辺における丘陵をめぐる実践

ベルファスト丘陵西部の山であるブラックマウンテンのふもとの地域は、1940 年代後半から行政による住宅開発が始まり、1960 年代までには広く「アッパープリングフィールド地区」と呼ばれる市街地が形成された。また、紛争勃発後にはこの地区でも激しい衝突が起き、反英国的なリパブリカン地区として確立した。地区の住民たちは、隣接するブラックマウンテンで散策などのレクリエーションを長年おこなってきており、英国軍が山に駐留していた期間もそれをやめることはなかった。また、1980 年代後半には企業によるブラックマウンテンでの採石に対して、A さんを中心とした住民たちが反対運動を展開し、採石の拡大を阻止した。このようなブラックマウンテンをめぐるのは、現在まで様々な立場の住民による様々な実践が展開されてきたが、そのうちの主要な 4 つを以下に記述する。

B さんと C さんは 1977 年と 1981 年生まれの子兄弟で、上記の A さんの息子たちである。A さんは単なる環境活動家ではなく、地区で長く政治活動やコミュニティ活動に関わってきた人物であった。そのため A さんは、採石反対運動に取り組む際、それを紛争で社会的・経済的に困難を抱えた地元コミュニティ全体の利益と結び付けるようなかたちで展開した。その A さんの実践を

目の当たりにしながら B さん・C さんは育ち、子供の頃から頻りにブラックマウンテンへ遊びに行った。現在、A さんによるコミュニティ活動や政治活動を B さん・C さんは引き継いでおり、近年では仲間とともにブラックマウンテンをめぐる A さんの実践を引き継ぐ試みにも乗り出している。例えば、2017 年から「ブルーベルフェスティバル」というイベントを毎年開催し、そこではブラックマウンテンでのランニングや自然体験などがおこなわれてきた。また、2018 年には A さんの運動や山と地域の人々のつながりに関するオンラインアーカイブを完成させた。さらに、2020 年からは山へのアクセスを改善するプロジェクトが進められている。ブラックマウンテンに登るルートは私有地や私道を通っており、法的には非合法なアクセスであったため、このプロジェクトではそれらの土地の所有者たちと正式な合意を作ることも目指されている。

D さんは 1969 年生まれの男性で、青年期までブラックマウンテンの自然と親しんだ経験を持つ。また、紛争の渦中で育った D さんは、反英国的な政治活動に長く関わると同時に、地区でリパブリカン芸術に関わる活動もおこなってきた。このような経緯から、2012 年に D さんは英国女王の北アイルランド訪問に抗議するため、ブラックマウンテンに布で作った政治的なメッセージを設置した。そして、現在に至るまで仲間とともに折に触れて同様のメッセージ実践を山でおこなってきた。これらのメッセージは基本的にはリパブリカンの立場からのものであり、D さんは、「我々の立場はメディアによってきちんと伝えられていない。我々は政治的に権利を奪われていて、地元紙ですら我々の言いたいことを伝えられない」と語る。また、D さんたちは地区の他の人々から「自分たちのために山にメッセージを置いてほしい」と頼まれ、それを引き受けることもある。D さんは、山にメッセージを置く際にはその近くに住む土地所有者から毎回許可を得てきた。他方で、彼は B さん・C さんがブラックマウンテンへのアクセスを改善しようとしていることについても肯定的である。

E さんは 1997 年生まれの紛争後世代の男性であり、子供の頃から現在までブラックマウンテンに棲む野生生物に関心を持ち続けてきた。彼は 2020 年に仲間とともに山でのごみ拾いを始め、その過程でブラックマウンテンでは絶滅したと思われていたマツテンの生息を突き止めた。また、この活動の許可のため E さんはブラックマウンテンの土地所有者たちを訪問して親しくなり、彼らの許可を得てマツテンや野鳥のための巣箱を山に据え付けていった。また、農業などに使われていない土地で植林や池の造成もおこなった。E さんはこれらの実践を「ブラックマウンテン再野生化プロジェクト」と名付け、山の自然やそこでの自分たちの活動について、SNS での発信をおこなっている。また、E さんは地元コミュニティとの関わりも持ってきており、例えば上記のブルーベルフェスティバルにおいて山での掃除や自然解説を引き受けている。他方で、E さんは B さんたちが山へのアクセスを改善しようとしていることについては反対している。なぜなら、舗装や標識などができれば山は「野生」でなくなると考えているからだ。また、多くの人々が山に来るようになって野生生物が減ってしまうことも E さんは懸念している。他方で、D さんたちの実践に関しては、E さんは気にしないという。

F さんは 1965 年生まれの女性であり、ブラックマウンテンの多くの土地を所有している。1969 年から山際にある現在の自宅に住み、彼女の父親はそこで農業を始めた。しかし、F さんの家の農地にはアッパースプリングフィールド地区の若者がレクリエーションにやって来ており、1980 年代頃には住宅開発の進展によって彼らの数や反社会行動が増え、農業に支障をきたすようになった。そのため 1985 年に父親は農業をやめて家畜をすべて手放してしまい、動物好きの F さんは「悲しくて胸が張り裂けそうだった」という。その後もブラックマウンテンに登る人々の数は増え、不法投棄などの反社会行動が増加していった。そんな折に F さんは E さんに出会い、彼が自分と同じように動物を愛していることから仲良くなった。F さんも、B さんたちが進める山へのアクセスの改善については反対しており、土地所有者の一人として合意を求められているが、現在まで首を縦に振っていない。F さんは、舗装や標識ができればより多くの人々が来るようになり、彼女の家の財産や野生動物への被害が増えると考えており、2017 年頃からは山へ登る道に柵を据え付けて入りにくくしたり、複数の監視カメラを設置したりしている。なお、D さんたちの実践については、時々良いメッセージが置かれることもあるので気にかけないという。

#### (4) 環境的平和構築研究への示唆と今後の課題

以上のような、ベルファスト丘陵へのレクリエーションアクセスの歴史や、西ベルファストにおける住民たちの実践からは、この地域においては「紛争問題」と「都市問題」が多様な形で絡まりあっていることが分かる。

ベルファストの人々の丘陵へのレクリエーションアクセスは、約 30 年にわたる武力紛争によって、大きく制約を受けることとなった。しかし、そのようなアクセスは完全に潰えてしまうことはなく、紛争下でも日常を保持しようとする人々によってしたたかに続けられた。そして、それらの人々を中心として丘陵へのアクセスを再び活性化させる流れが作られ、しばしばこの流れはカトリック/プロテスタントといった住民間の分断を越え、人々が共在あるいは協働する場面も生み出してきた。他方で、丘陵へのレクリエーションアクセスの拡大は、農民を中心とした土地所有者の反発を顕在化させていくことにもつながった。このように比較的落ち着いた紛争後社会の中で、紛争経験に基づく制約が次第に縮小する一方、都市辺縁で農業をおこなう人々による制約が増しており、丘陵へのレクリエーションアクセスをめぐる紛争問題と都市問題の絡まりあいは、次第にそのウェイトを後者の方へ移ってきている。

また、ブラックマウンテンをめぐる B さん・C さん、D さん、E さん、F さんの実践は、状況を

紛争問題の文脈で捉えるフレームと都市問題の文脈で捉えるフレームの絡まりあいの中にそれぞれ位置づけられる。このうち最も紛争問題フレームが強いのは、Dさんの実践である。英国による北アイルランド統治という紛争の核をなした問題は現在進行形の事態でもあり、Dさんはそれへの抵抗のために山に政治的なメッセージを置いてきた。次に紛争問題フレームが強いのは、Bさん・Cさんの実践である。彼らの実践は、Aさんの政治活動やコミュニティ活動を引き継ぐもので、紛争時代から続く地区の問題への対処として、山に関わる様々なプロジェクトに着手してきた。ただ、彼らは地区の問題を都市問題として捉えることもある。これに対し、より都市問題フレームが強いのがFさんの実践である。彼女は、山での反社会行動の増加を「紛争のせいでもあった」と語るが、主な背景としては都市化の進展が考えられている。この認識に基づいて、Fさんはブラックマウンテンへのアクセスのコントロールを強めてきた。最後に、最も都市問題フレームが強いのは、Eさんの実践である。Eさんは紛争後の時代に育っており、ブラックマウンテンの野生生物やその生息地を回復させるという彼の実践は、都市化の進行に伴う自然環境の縮小という問題に主に対処するためのものである。このように、ブラックマウンテンをめぐるのは、「紛争」と「都市」という2つの状況認識の文脈が存在しており、現在の比較的落ち着いた紛争後社会においては都市問題フレームが以前より強くなっていると、それぞれのフレームに基づく実践の間で対立が生じることもある。ただ同時に、都市問題フレームの強い人々が紛争問題フレームの強い人々への理解が全くないわけではなく、その逆もまた然りである。

上記のような状況は、紛争と自然資源管理の関係性を問う環境的平和構築研究の視点から見ると、ベルファスト丘陵への共通の愛着や関心が、プロテスタント住民とカトリック住民の間の協働を小さいながらも生成してきたと言えるだろう。他方で、丘陵へのレクリエーションアクセスの拡大へと向かう流れは、Fさんのような都市の辺縁で暮らしてきた人々や、Eさんのような環境意識のより先鋭な紛争後世代との軋轢を生じさせている。ただ、Bさん・Cさん、Dさん、Eさん、Fさんの実践はいずれも、ブラックマウンテンに対する愛着や関心に支えられたものである。つまり、自然環境への共通の愛着や関心は、紛争当事者間の平和構築に一定の役割を果たしうるが、比較的落ち着いた紛争後社会のフェーズにおいては、平和構築とは別の局面での対立を同時にもたらすこともあるのだ。これは、紛争当事者間の関係性に中心的な関心を寄せてきた従来の環境的平和構築研究では描かれてこなかった事態である。

以上が本研究によって得られた成果である。なお、上記の紛争問題と都市問題は、フレームとしても実際としても別々に存在しているわけではなく、互いが互いを支えあっているような関係性にあることも調査の過程で見えてきた。よって、この2つの間にある関係性をよりクリアに分析していくことが今後の課題である。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 北島義和	4. 巻 36
2. 論文標題 「紛争」と「都市」の狭間で：北アイルランド、西ベルファストにおける人々と山の関わり	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 社会科学研究	6. 最初と最後の頁 89 - 109
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 北島義和	4. 巻 57
2. 論文標題 いくつもの「移動に住まうこと」から問う場所：北海道屈斜路湖周辺の観光・レクリエーションを事例として	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 年報村落社会研究	6. 最初と最後の頁 131-175
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 北島義和	4. 巻 25
2. 論文標題 「失敗」と生きる術を「失敗」の地から学ぶ：宮内氏の書評に就いて	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 環境社会学研究	6. 最初と最後の頁 224-228
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 北島義和	4. 巻 64巻1号
2. 論文標題 書評に就いて	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 ソシオロジ	6. 最初と最後の頁 168-172
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 Satoshi Watanabe, Yusuke Ashida, Yoshikazu Kitajima, Hiroyuki Kaneko, Mayumi Sato
2. 発表標題 The Uncanny Manifesto: Some Conceptual Issues to Capture Rural Reality in Japan
3. 学会等名 IRSA2022: XV World Congress of Rural Sociology (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 北島義和
2. 発表標題 いくつもの「住まうこと」から問う地域 北海道屈斜路湖周辺のレクリエーション利用を事例として
3. 学会等名 日本村落研究学会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 渡邊悟史・芦田裕介・北島義和編著、佐藤真弓・金子祥之著	4. 発行年 2023年
2. 出版社 ナカニシヤ出版	5. 総ページ数 172
3. 書名 オルタナティブ地域社会学入門：「不気味なもの」から地域活性化を問いなおす	

1. 著者名 松田素二・阿部利洋・井戸聡・大野哲也・野村明宏・松浦雄介編	4. 発行年 2021年
2. 出版社 山代印刷株式会社出版部	5. 総ページ数 372
3. 書名 日常実践の社会人間学 都市・抵抗・共同性（北島義和、「都市・紛争・自然 ベルファストにおける野外レクリエーションの環境史」）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------